

表10 集団討議に関する質問事項の因子負荷行列（バリマックス回転後）

項 目(要 旨 ^註)	第1因子	第2因子	第3因子
1. 与えられた情報で事例の内容がよく理解できた	.116	-.069	.126
2. もっと情報があればよい解決が得られたと思う	-.467	-.100	-.059
3. この事例を話し合うことに興味があった	.744	.168	.292
4. 話し合いは価値があることだと思った	.770	.143	.230
5. 話し合いが早く終わればよいのにと思った*	.541	.046	.257
6. グループ討議で解決することは重要である	.648	.179	.169
7. 別の機会にこんな事例の話し合いがあれば参加する	.660	.336	.184
8. 同じグループの人々の気持ちはじっくりしていた	.303	.422	.728
9. 討議中このグループから抜け出したいと思った*	.472	.187	.344
10. 別の機会にもこのグループの人々と一緒にやりたい	.232	.892	.177
11. 別の仕事でもこのグループの人々と一緒にやりたい	.188	.844	.174
12. 討議結果はともかく、グループはまとまっていた	.247	.398	.697

注 記載欄のスペースの都合で表現を圧縮してある。原文は白樫（1978）を参照されたい。
 なお、項目の末尾に付した*印は、その項目が逆スケールであることを表す。

ら第1因子を「課題への動機づけ」、第2因子を「凝集性（1）：集団への誘引」、第3因子を「凝集性（2）：集団のまとまり」と名付けた。従来の集団凝集性の概念はこれら第2因子と第3因子とを合わせたものとして捉えられていたが、ここでは別の変数として分けて検討することとした。各変数の得点化は次の通り行われた。

課題への動機づけ 項目2,3,4,5,6,7,9に対する回答の尺度値の平均

凝集性（1）：集団への誘引 項目8,10,11に対する回答の尺度値の平均

凝集性（2）：集団のまとまり 項目8,12に対する回答の尺度値の平均

集団の雰囲気を測る8個の形容詞対についても因子分析を行ったが、これらはすべて単1の因子に高く負荷していたので、単一の尺度として扱うことにした。

集団の雰囲気 8個の形容詞対のそれぞれに好ましい側から5,4,3,2,1の得点を与えたときの回答値の平均

これらの変数の取り得る得点の範囲は、いずれも1.00から5.00までである。こうして得られた各変数の得点の時間的推移を、2種の課題ごとに等質集団群と異質集団群とで比較したのが図5である。

まず、課題への動機づけ（図5の1aと1b）についてみると、乱数表集計作業が問題解決課題より低い値を示している点は、第1実験の乱数表集

計作業と創造性検査の関係に似ているものの、等質集団と異質集団の間には両課題ともすべての時点で差が見られなかった。また、時点間の上昇・下降にも有意な変化がみとめられない。

凝集性（1）：集団の誘引（図5の2aと2b）についても、乱数表集計作業の方が問題解決課題よりいくぶん低い値を示しているが、等質集団と異質集団の間にはどこにも有意差は見られない。しいて違いを挙げれば、乱数表集計作業において異質集団では第1期から第3期へと有意な上昇を示したのに、等質集団では変化がみとめられなかった。

凝集性（2）：集団のまとまり（図5の3aと3b）も、乱数表の集計作業でいくぶん低い値を示しているものの、等質-異質集団間にはどの時点でも有意差はみとめられなかったこと、そして乱数表の集計で異質集団が第1期から第3期へと有意な上昇を示したのに、等質集団は有意な変化を見せなかったことなどは、上と同様であったが、問題解決課題では両集団そろって有意な上昇を示した。

集団の雰囲気についても、凝集性（2）とまったく同様のことがいえる。両集団間にみられた唯一の相違は、またしても乱数表集計作業で異質集団は第1期から第3期へと有意な上昇を示したのに、等質集団はなんらの変化も示さなかった点であった。

以上、第2実験の結果を要約すると、集団の成